
グッバイ ディア

蜻蛉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グッバイ ディア

【Zコード】

Z9932Z

【作者名】

蜻蛉

【あらすじ】

目が覚めたら猫になっていた。

横に潰れたような顔にふさふさの橙色の毛並み。

そんな異世界での私と一人の少年の交流のおはなし。

性格の悪いジャイアニズム猫（元人間）とひねくれ者のぼっち少年。一人だけの物語が、少しづつ広がっていく。

お題は「メソン」様より。

1・生きてみせるや、一人で

私はビームるんでしょつか？

ガンガンと痛みを訴える頭を無視して周囲を見回す。

……森だ。どうからどう見ても森だ。

生い茂る木々に、水に濡れた土の匂いが鼻先をくすぐる。
太陽を覆い隠すほどに鬱蒼うつそうとした大木が、どこまでも続いていた。

昨日は普通に家の布団で寝たはずだ。うん。じゃあ、なんでこんな所で目覚めたんだろう。

目が覚めたら木の根を枕にして寝ていただなんてどんな酔っ払いだ。うつかりにも程がある。

それとも、気付かなければすぐに昨日の夜はファーバーしてしまったつただろうか？

いやいや。……あれ？ してないよね？

昨日の出来事を思い出そうにも、記憶がまるで白い靄のかかったようになじみでぼんやりとしている。

そして何故か思い出さうとするほど頭がズキンと痛んだ。

……考えれば考える程、ちゃんと家に居た自信が無くなるのがひどく恥ずしい。

「…………」

それにしても、こきなり森は無い。

唚然とその場に突つ立つていると、ビームからか流れる水の音が聞こえてきた。

音のする方に目を凝らすと、湧き水が小さな滝のようにチョロチョロ

口と流れている。

まあいい、とにかく考えるのは後だ。まず水を飲もう。

目が覚ますのにちょうどいいし、喉もカラカラだった。

それに起きてからずっと続いている、一日酔いのような頭痛も酷くて考えるのが結構辛い。

ほんと昨日何があつたんだ。と、思いながらフラフラと湧き水へ足を進める。

足下で小枝がポキリと折れる音がした。そういうえば視点がやけに低い。

水までの距離は妙に長かった。ぼうっとする頭のまま小さな川のように流れる湧水を覗き込む。

「……っ？」

みかんだ。

私は驚きのあまり水面を見て瞬きした。みかん色の猫がいる。透き通った水面には鮮やかな橙色の毛をした猫が写っていた。

ぶつさいくな猫だなあ。しみじみと私は思つた。

鼻はつぶれたようにペチャッとしているし、顔は全体的に横に間延びしている。

うつすら開いた口が、そのどこか間抜けな顔を強調していた。

子猫のくせに、なんか丑つきも悪い。

しいて良さそうところを上げるとしたら、ふさふさとした鮮やかなみかん色の毛並みだろうか。

子猫の顔が埋もれる程ふかふかとしていて、撫でてやつたら手触りが良さそうだ。

まじまじと思いながら水へ顔を近付けると、何故かその猫の顔も一同キツと水面に近づいた。

……ん？

何かおかしいぞ。そういえば、映つているはずの私の姿が水面に映つていらない。

なぜ、水面には猫の姿しかないんだ。

足元に這つてきた虫を避けると、水面に写る猫もヨロヨロと片足を上げる。

猫のくせになんとなく覚束ない足取りだ。

水にもう一度顔を近付けたら、猫の少し潰れた顔もアップになった。背中で冷や汗を流れる感覚がする。ザワツと鳥肌が立つて、猫の毛も威嚇するみたいに逆立つっていた。

信じられない光景を前に、目を擦るために腕を持ち上げる。しかし、目元に現れたのは毛皮に覆われた肉球だった。
いやいやいや、有り得ない。

ドッキリ? そんな馬鹿な、全然笑えんわ。

もう一度じっと水面を見下ろす。

水の表面には妙に表情豊かな猫が、その今にも叫びだしそうに私を覗きこんでいる。

その猫は、間違いなく私だつた。

2・ひとかじつの「わがまう

おなかすいた。

「…」
「…」

三日だ。

もう三日何も食べていない。体力的にも精神的にも限界だった。

『かえりたい』

家に、帰りたい。

切実なぼやきは小さな喉元を通り、ニヤーといつぱりだけた鳴き声に
変わる。

ニヤーってなんだニヤーって。

妙に哀愁が漂う猫の声が地面に落ちた。

猫の姿になつてこの三日間。

夢なら覚めないだらうかと寝てみても、夢は覚めるビリビリがます
ますお腹の虫がその存在を主張するだけだった。

ずいぶん、ながい夢だ。

夢にしては脚は痛いしお腹も空くし最悪としか言つようが無い。

あの森で田覚めて一日田は、辺りをひたすら歩き回つた。木に登つ
てみたりもした。思つた以上に簡単に木の上にあがれて、ずいぶん
と身軽になつた体に驚いた。きっと夢だと思っていたから。

しかし、冒険気分で楽しめたのはそこまでだ。

ここは森だ、そして森には動物がいる。捕食する側だけでなく、捕

食“される”側にも回ったのだ。

水場で熊を見かけたとき、私はやつとそのことに気付いた。気が付いてすぐに逃げた。ひたすら走った。大木の上に登つて、やつと体の力を抜いた。恐怖で体が震えるのは、はじめてだった。

二日目は昼まで木の枝の上でひたすら眠った。夜は眠れなかつた。いつ野生の動物に見つかるかわからない今、地面へ下りるのは酷く心もとない。

いくら寝てもこの悪夢から覚めることはなかつたけど それでも、寝ている間だけは空腹を忘れられた。

とうとう、空腹を誤魔化せなくなつた三日目の朝。

私は川をただり人を見つけようと決めた。

昨日、そう遠くない場所で猟銃の音が響いたこともその決心を強くした。

猟師がいるなら近くに人里もあるはずだ。川の下流には人が居るのではないか。

はたして、読みは当たつていた。

当たつていたが、とことん私は神さまに嫌われているようだ。

私は唖然とその光景を眺めた。

道行く人々の姿はまるで映画の撮影のように、昔のヨーロッパの人たちみたいな服装をしている。

にぎやかで、活気に満ち溢れた町並みは、ぜんぜん別の世界のようだつた。

(なんで、)

(… なんで、みんな そんな格好をしての?)

ビュウとすぐ横に突風が通り抜ける。ガラガラと鳴る車輪と馬が石畳を蹴る音を響かせ、私の目の前を馬車が駆けて行った。道行く人々の声が、すべてが、どこか違う世界の出来事のように遠い。

ここは、どこだ？

3. これらへのひびき（複数形）

注意* やや虫歯感覚あります。

3・あこがねひら

「あ、猫だ！」

突然高い声が聞こえた。無意識に体がピクリと震える。声のした方に顔を向けると、小さな女の子がこちらをじっと見つめていた。その声につられたのか、気付いた子供が私のまわりにぞろぞろと集まってくる。

「ニ、ヤツ！」

思わずギョッとして後退る。威嚇混じりに鳴いてみたが、なにが嬉しいのか子供たちは笑って喜んでいた。

……おい、これ全然威嚇の意味ないじゃん！

それどころか小さい手で尻尾をわし掴みにされてゾワリと全身の毛が逆立つ。

ちょ、マジ勘弁！本氣で泣きそつ。

そんな悲鳴も「フギヤーシ」という哀れな猫の鳴き声にしか聞こえず、益々子供たちは喜ぶばかりだった。……子供は天使とか絶対嘘だろ！？

いままさにそれを強制的に体感させられている。きっと半分以上が親の欲求なのだ、そうに決まっている。だってこいつらどうじゃん。無邪気さに見せかけたサディストの軍勢じゃんね。あ、なんか新たな性癖に目覚めそう。

涙目でじりじりと後退つたところで尻尾が壁にぶち当たった。薄ら寒いものが背筋を伝づ。

やばい、囮まれた……！

私を覗き込んでくる何対もの大きな瞳に悪寒がはしる。気分は動物園のモルモットだ。

「かわいいなあ」

「にやんこ、こいつちよいで」

「なんかあげよつよ」

「さつき捕まえたチヨウウチヨならあるよ」

「こいつ虫食うかな?」

子供の一言に血の気が引いた。余計な提案しやがつて……！
がきんちょの一人が私の顔に捕まえたらしき蝶を近づけてくる。
ストップいじめ、ダメ絶対！ 誰が食つか、と意地でも口を開けない私に焦れたのか子供は容赦なく口元へ押し付けてくる。ちょ、てめほんとやめて。無我夢中で顔に近付けられた手をたたき落とす。必死で腕を動かしていると、爪の先で何かを引っかけた感触がした。虫を手に持っていた少年が小さく息を呑む音が聞こえる。

「つ！ ……いて」

みるみる彼の田元に涙が溜まっていく。陽に焼けた手に薄っすら赤い一線が走っていた。

傷は掠り傷程で、決して深くは無い。が、反撃されたこと自体ショックだったのか子供は啞然と田を見開いている。

今しかない。

脚は反射的に駆け出していた。隙間を縫うように子供たちの間から勢い良く飛びだす。

罪悪感が無いわけじゃないけど、この場合自分の安全の確保が一番

だと思ひ。

「あーー!逃げた!」

子供の声が後ろから聞こえた。

ひたすら逃げた。

無邪気に追いかけてくる子供たちから必死で逃げ。

「あら猫、そういうえば最近うちのネズミが多いの」と私を抱き上げ
ようとした、優しそうな奥さまからも全力で逃げた。

……いやムリ。だつて無理。猫の姿をしていてもこっちは人間だし、
ネズミを捕るだなんてそんな度胸ない。

(あまかつた……)

人に会つたら何とかなるなんて、私はだいぶこの世界を舐めてたようだ。お腹が空きすぎた所為で足取りも覚束ないけれど、それでも
気力で足を進めていた。

(……頭がくらべじする)

目の前の景色が擦れ始めた。視界がどんどん黒く塗りつぶされていく。やわざわとした街の喧騒も遠くなっていくのに気付いた。

そういえば空っぽの胃で全力疾走したのだ。これじゃあ倒れるのも
当たり前だ。

歩く力も、もうない。

ふらふらと、どこかの家の軒下に横たわる。私はそうして目を閉じた。

4・餌付け完了

ふたたび気が付いたのは、真上に昇った太陽が西に傾きはじめた時だった。

無意識に鼻がピクリと動く。

食べ物の匂いがする。それも、近くに。

まぶたをそろりと開けて、匂いのする方向を見た。

ぼやける視界の向こうに少年が見える。なにか書物を熱心に読んでいるらしい。どうやら、その美味しそうな匂いは少年の横に置いてある包みから漂ってきてるみたいだ。

「……、」

彼は親の仇を見るように書物をみていた。たぶん目つきが悪いのだと思つ。よっぽど集中しているのか、こちらに気付く様子はまったくない。風にサラサラと銀色の髪が揺れていた。

ごくり、とつばを飲み込む。

なにこの匂い、めっちゃうまそう。

空腹の人の目の前で無防備にご飯の匂いを漂わせるのは、猫の目前にマタタビをぶら下げるのと同じようなものだ。馬に人参。ヤギに塩ともいう。美味しいそうな匂いに、今にもお腹と背中がくっつきそうな私はもうメロメロだった。

そういうや、極限状態に置かれると人間は本性が出るとかいうよね。たとえば、ここにお腹が空いて死にそうな人間が一人いるとする。そのうちの一人に、一つだけちいさなパンを渡すのだ。そうすると

結果は大きく分かれる。そのちいさなパンをさらに一つに分けてもう一人に与える人もいれば、ひとりだけで食べてしまう人もいる。パンを貰えなかつた人が、貰えた人に襲い掛かつて奪うこともあるだろう。なら私は間違なく後者だ。

しかも私はいま猫である。ちょっとくらい理性がぶつ飛んで、本能に突つ走つてしまつても仕方ないとと思うのだ。

……つまり何が言いたいのかつて？

幾重にも重ねたオブラーートと言い訳を取り扱つと『そのメシよこせや』である。

というか、とつくに太陽は真上から西へ傾き始めているのに少年は本からちつとも視線を外さない。どうせ食べないのなら、私が頂いちゃつても問題ないんじやないか。てが喜ばれるんじやない？むしろエフだよね。私のジャイニアズムな、ひねくれ過ぎて二回転半きりもみ飛行中の思考回路は、そう当たり前のようになづけた。空腹つてオソロシイヨネ。ヤンキーもびっくりなトンデモ理論である。ゲスい？よく言われる。

慎重に彼の包みへと狙いを定める。ここから彼までの距離は約一メートル。私に気づく気配は全くない。よし、いける！

いまにもよだれが出てきそうな、美味しそうな匂いの包みに飛び付く。包みに噛みついて引っ張るけども、なかなか引きづれない。これ、意外と難しいぞ。

「……なつ！」

そのときガサゴソとする音に気付いたのか、やつと少年の目が私をとらえて驚いたように大きく瞳を見開いた。一拍後に私を捕まえようと手を伸ばしてくる。

でも、ほんの少しだけ遅かった。

私はすでに包みを銜え込むのに成功し、塙の上に飛び移ろうと、後ろ足を跳躍させていた。

唚然と立ち尽くす少年に、『ありがとよ』の意味をこめて尻尾をゆるりと一度ふる。

そして颯爽と立ち去るうつと塙を飛び下りた、……筈だった。直後身体に強烈な衝撃が襲う。

「一ギヤ！？」

「！」の馬鹿猫！人のご飯を盗もうとするなんて躾がなってないね

私にぶつかった何かが地面へ転がり落ちていくのが黒く塗りつぶされていく視界のはじに映る。……おい、あれ、本じゃないか！動物虐待という文字が脳内を駆け巡ったのを最後に私の意識はブラックアウトする。

それが奇妙にも短いようで長い付き合いをする」となる私と彼、……アルベルト少年との出会いだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9932z/>

グッバイ ディア

2012年1月14日19時50分発行